特集

憲法と私たち

現在、日本国憲法の改悪への動きが推し進められようとしています。現政権がめざす方向で私たちの平和や障害者の生活は守られるのでしょうか？　本特集では、そもそも日本国憲法はどのようにできたのか、いま日本国憲法がもつ価値はなにか、を考え合いたいと思います。

対×談

憲法の価値を語り合って

安田莱津紀　暉峻淑子

難民の現場をみて

●お二人は難民の人たちの現状を見てこられましたが、そこで感じたことを教えてください。

暉峻　私は、旧ユーゴスラビア内戦で国を追われた難民の支援をしていて、そのなかで阪神大震災で被災した子どもたちとユーゴの難民の交流を実現したことがありました。

ユーゴの人たちは「自分たちは一夜にしてすべてを失うという経験をよく知っている、だからあなたたちの悲しみを心からわかって慰められるのは自分たちだと思う」と語っていました。ユーゴから帰ってきた日本の子どもたちは、復興した頃に今度は自分たちの家に来てほしいと、日本にユーゴの子たちを招きました。そうした姿を見て、人間には助け合う精神というのがあるのだなと感じました。

安田　東日本大震災の被災地でも同じようなことがありました。陸前高田市の仮設住宅に住むおばあちゃんたちにシリア難民の話をする機会があり、シリアでは、すごく気温が下がるので子どもたちが凍死したり、つらい思いをしている現状を伝えたら、「孫や子どもが使わなくなった服を集めよう」と仮設住宅中に呼びかけてくれました。

そのなかの一人のおばあちゃんが「私は避難生活をするのは3回目です」と話してくれました。1回目は第二次大戦中の空襲、2回目は1960年のチリ地震の津波で家を流され、そして3回目が東日本大震災。そのおばあちゃんは「避難生活は大変だった。でも、それでも私は国を追い出されるまで追い詰められたことはない、シリアを追われて避難生活を送っている子どもたちはきっと大変な思いをしているよね」と話してくれました。服を届けた先のシリアの方々も東日本大震災のことはよく覚えているので、いつか自分たちに余裕ができたら何かお返ししたいと言っていました。そういう生きた交流が生まれているなと思います。

暉峻　体験者同士ってわかり合えますよね。体験していない人にとってはなかなか実感はしにくいけど、ニュースなどでも見ることができるから、そこから関心をつなげてほしいですね。

安田　そうですね。若い世代の子たちにもう少し共感する部分をつくりたいと思っています。

先日、難民問題のシンポジウムを聴きにきた高校生に、「なぜ難民問題に興味をもったの？」と聞くと、その子は「私は食べることが大好きで、一日のなかで食べる時間が一番幸せだけれども、テレビで見た難民の少女が、将来の夢を『お腹いっぱいに食べること』と話していたのに衝撃を受けた」と言いました。自分が毎日楽しみにしている時間が、この子にとっては将来の夢なのか、と。そこから難民問題に関心をもつようになったということでした。

そうした自分の好きなことや大切にしていることに端を発すると、遠い問題という感覚も少しずつ超えてくるかもしれない。そうした身近に感じられるものを私たち大人が若い世代にもっと増やさなければいけないと思います。

憲法の理念との乖離

●憲法の理念と現実が乖離している現状をどう感じていますか？

暉峻　今、本当に民主主義は瀕死の状態に陥っていると思います。私は戦前の記憶があるので、戦後の日本国憲法のありがたさはよくわかります。

安倍政権は、秘密保護法や安保法制などを強行に通してしまって、憲法を骨抜きにしてしまっています。でもそうしたやり方を支持する人もいる。憲法の前文に主権は国民にあると書いているのですが、私はその国民が心配で仕方がないです。

安田　教育の問題が大きいと感じます。私が受けた教育も、例えば「三権分立」を暗記はしたけれども、それでは実際に選挙で選ぶとなったときに、どういうことに留意して選ばなければならないかを習いませんでした。主権者教育ではないなと思います。

でも、自分より下の世代の子たちの興味範囲は、必ずしも安倍政権が掲げることと一致しないこともたくさんあると感じます。例えば、夫婦別姓がいいと